

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K20053

研究課題名（和文）オランダ植民地期末期のインドネシアにおけるイスラーム運動とマス・マンスール

研究課題名（英文）Islamic movements in Indonesia and K. H. Mas Mansoer at the end of the Dutch colonial period

研究代表者

土佐林 慶太（TOSABAYASHI, Keita）

早稲田大学・文学大学院・助手

研究者番号：10905764

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、20世紀前半のオランダ領東インドにおけるムスリムの大同団結運動とその指導者マス・マンスールに着目し、その活動や思想形成が独立後のインドネシア社会に如何なる影響を与えたのかを考察した。インドネシア、オランダ、エジプトでの調査を通して、以下の三点を明らかにした。すなわち、1) 1910年代から彼がスラバヤを拠点に行なった活動やその思想が、その後の団結運動において重要な意義を持つこと、2) それらの団結運動において、イスラームとナショナリズムを接合させる活動が展開されていたこと、3) 独立インドネシアにおけるムスリムの社会進出を考える上で、この時代のムスリムの活動を考察することの必要性である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究対象は、従来から研究者が高い関心を払ってきたインドネシア・ナショナリズム運動「栄光の時代」にあたる1920年代後半までと1942年3月に開始する日本軍政期を連結する時代である。この時代を分析することは、日本軍政期や独立インドネシアの問題を考える上でも、その「継続」や「断絶」に関する議論を行うために、必要不可欠である。また、オランダ植民地政庁とイスラーム諸勢力の関係を考えることは、ムスリムと非ムスリムの関係、さらには国民統合とイスラームの関係を考える上でも、意義がある。世界最大のムスリム人口を抱えるインドネシアの事例は、他の国民国家との比較研究にも、貴重な題材を提供することができる。

研究成果の概要（英文）： This study focused on the solidarity movement of Muslims and its leader K. H. Mas Mansoer in the Dutch East Indies at the first half of the 20th century and examined how their activities and ideological formation influenced the Indonesian society after its independence. Through extensive research in Indonesia, the Netherlands, and Egypt, the following points have been observed: 1) That the works and ideologies of K. H. Mas Mansoer in Surabaya after 1910s significantly influenced subsequent solidarity movement; 2) That through this movement, unification of Islam and the concept of nationalism evolved; and 3) That in consideration of the social advancement of Muslims after the independence of Indonesia, it is important to analyze the influence of Muslims activities at the end of the Dutch colonial period.

研究分野：インドネシア近代史

キーワード：東南アジア史 インドネシア イスラーム マス・マンスール ムハマディヤ 連帯 ミアイ ナショナリズム

## 1. 研究開始当初の背景

20世紀初頭から中葉のインドネシア社会(1942年まではオランダ領東インド)は、いくつかの転換点を迎える。1901年にオランダ植民地政庁は、住民の福祉向上や権力分散などを骨子とする倫理政策を採用するが、1920年代後半になると共産党蜂起などが起因となり、植民地解放運動の弾圧政策に転じる。1942年3月には、オランダ植民地期が終了し、同時に約3年半に及び日本軍政期が開始する。1945年8月17日に、インドネシア共和国は独立を宣言するが、再植民地化を図ったオランダとの独立戦争は1949年まで続き、同年末にインドネシアは国民国家としてようやく正式な独立を達成する。本研究の主たる考察時期は、この弾圧政策に転じる1920年代後半から日本軍政開始までとなる。

従来のインドネシア・ナショナリズム運動史研究には、ふたつの問題点がある。第一に、インドネシア・ナショナリズム運動においてイスラーム諸勢力が果たした役割を十分に論じていない点である。1910年代にナショナリズム運動を主導したサレカット・イスラーム(Sarekat Islam)は、1920年代にはその主導権を共産党に奪われ、それはスカルノに代表される「世俗的」民族主義団体に引き継がれた。そのため、ナショナリズム運動史研究では、西欧教育を受けた民族主義・共産主義指導者に注目が置かれる一方で、イスラーム諸勢力の指導者(以下、ムスリム指導者)の国家像やナショナリズム運動への関与は十分に検討されていない。

第二に、本研究で扱う時期はインドネシア・ナショナリズム運動における「停滞期」と捉えられがちで、この時代のムスリムの営みに関心が払われてこなかった点である。たしかに、共産党に代わり台頭した「世俗的」民族主義団体も、政庁の弾圧政策により、1930年代以降はその多くが活動休止状態となる。一方、ムスリムの活動について、オランダは反植民地主義運動とならない宗教的営為には、直接干渉しなかった。彼らの営為のうちに、イスラームとナショナリズムを接合させる活動も展開されていた。

## 2. 研究の目的

本研究は、オランダ植民地期末期のインドネシアにおけるイスラーム運動、特にムスリムによる大同団結運動に着目し、その活動や思想形成が独立後のインドネシア社会に如何なる影響を与えたのかを考察するものである。インドネシア・ムスリムの連帯を目指した活動とそれを率いたマス・マンスール(K. H. Mas Mansoer)というウラマー(宗教学者)に焦点をあて、植民地期末期にインドネシア・ムスリムが志向した国家像を分析し、インドネシア・ナショナリズム運動史におけるイスラーム運動とその指導者マス・マンスールの役割を明らかにすることを目的とする。具体的には、以下のふたつの課題に取り組むことにより、本研究の実現を図る。

### (1) マス・マンスールの活動経歴と思想の分析

マス・マンスールは、オランダ植民地期末期から日本軍政期にかけてのインドネシアを代表するムスリム指導者である。メッカやエジプトのアズハル大学で学び、インドネシア帰国後は、サレカット・イスラームやムハマディヤで活動した。ムハマディヤでは、スラバヤ支部結成を主導し、ムハマディヤ・スラバヤ支部長、ムハマディヤ・東ジャワ地域委員長、ムハマディヤ・中央本部委員長の職を歴任した。これらイスラーム諸団体での活動の他に、1926年には、メッカで開催されたイスラーム世界会議のインドネシア代表、日本軍政期には、スカルノやハッタと共に、インドネシアを代表する4人の指導者(Empat Serangkai)の一人に選出された。独立後は、国家英雄(Pahlawan Nasional)にも選出されている。

以上のように、多様な分野で活動したマス・マンスールであるが、彼に関する研究にはふたつの問題点がある。ひとつ目は、Alfianの*Muhammadiyah*(1989)に代表されるように、ムハマディヤ史の中で、マス・マンスールの活動が注目される一方で、ムハマディヤの組織外での活動はあまり注目されてこなかった点である。ふたつ目は、彼に関する書物の多くは、伝記や評伝といった種類のもので多く、情報の典拠が示されず、歴史研究として取り扱いが困難な物が多い点である。より多様な一次史料や視点から、彼の活動や思想を分析する必要がある。

### (2) 植民地期末期のムスリムによる大同団結運動、及びイスラームとナショナリズムを接合させる活動の分析

ジャワでは、20世紀初頭から近代的なイスラーム団体が各地で設立され、1920年代からは、イスラーム諸団体による大同団結の動きが見られる。1922年から断続的に開催された東インド・イスラーム会議はその最初の試みであり、その後、マス・マンスールが主導して結成されたイスラーム諸団体の連合体であるインドネシア・イスラーム最高評議会(以下ミアイ、Madjlis Islam A' laa Indonesia, MIAI)は、オランダ植民地期におけるイスラームを旗印とした最大の大同団結となった。こうしたムスリムの大同団結について、Deliar Noerの*The Modernist Muslim*

*Movement in Indonesia* (1973) に代表されるように、先行研究は、参加団体間の主導権争いやイデオロギー的差異といった対立関係に注目する一方で、運動の背後にある思想や、そこで展開された具体的な活動についてはあまり検討していない。その結果、これらの運動が、独立インドネシアに果たした役割について十分に分析されず、インドネシア・ナショナリズム運動におけるイスラーム諸勢力が果たした役割についてもあまり言及されてこなかったのである。本研究では、これらの運動で展開されたムスリム指導者によるイスラームとナショナリズムを接合させる活動を分析し、インドネシア・ナショナリズム運動史において見過ごされてきた時代や対象を再評価することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究は、文献史料に基づいた歴史研究である。上記(1)と(2)の課題に沿って、便宜的に分けて記すが、両課題は相関関係にあるため、史料についても、両者で相互補完的に使用する。分析方法と主な史料は以下の通りである。

#### (1) マス・マンスールの活動経歴と思想の分析

マス・マンスールの活動について、1910年代から彼がスラバヤを拠点に行なった活動を時代順に網羅的に整理し、それぞれの活動の目的、思想、中心メンバーを探る。併せて、オランダ植民地末期のムスリムによる大同団結運動について、運動を指導したマス・マンスールとスラバヤにおけるムスリム指導者の関係を分析する。また、彼自身による論説や、彼について言及した著作物から、彼の思想的特徴を検討する。史料としては、サレカット・イスラームやムハマディヤ等、彼が所属する団体の機関誌だけではなく、同時代にインドネシア各地で発行された多種多様な定期刊行物、及び植民地政府の報告書を用いる。

#### (2) 植民地末期のムスリムによる大同団結運動、及びイスラームとナショナリズムを接合させる活動の分析

植民地末期のムスリムによる大同団結運動について、ミアイで展開された「メッカに居住するインドネシア・ムスリムの帰国事業」と「ムスリム指導者と各種団体の指導者で議論された独立インドネシアの国家構想」を分析し、それらの活動の意義を検討する。史料としては、インドネシアで発行された定期刊行物、及びオランダ植民地政府の報告書等を用いる。それらの報告書から政府の動向を探る。

### 4. 研究成果

2021年度は、世界的な新型コロナウイルス感染拡大の影響で、予定していた海外調査を行うことができなかった。しかし、2022年度にはインドネシア、2023年度にはオランダ・エジプトで海外調査を行ない、主に以下の調査成果を得た。

インドネシアでは、インドネシア国立図書館(Perpustakaan Nasional Republik Indonesia, ジャカルタ)旧館、及び新館において、1910年代から1940年代にインドネシアで発行された定期刊行物を調査し、マス・マンスールに関連する記事や彼の論説を収集した。オランダでは、国立公文書館(Nationaal Archief, ハーグ)、ライデン大学図書館(Universitaire Bibliotheken Leiden, ライデン)において、文献調査を実施した。具体的には、前者の公文書館にて、1910年代から1940年代に、インドネシアからオランダ本国、及びロンドンの亡命政府に送られたメールラポルト(Mailrapport)または複数のメールラポルトからなるフェルバル(Verbal)等の植民地文書を収集した。後者の図書館では、Rudolf Aernoud Kernのコレクション群を中心に、マス・マンスールやサレカット・イスラームに関連する史料を調査した。エジプトでは、マス・マンスールのエジプト留学に関連する土地でフィールド調査、及び文献調査を実施した。これらの調査に基づく暫定的な研究成果は以下の通りである。

#### (1) マス・マンスールの活動経歴と思想の分析

上記(2-1)の通り、従来のマス・マンスール研究は、ムハマディヤ以外での彼の活動について、十分に検討していない。また、その内容は彼がムハマディヤに参加する1920年代以降となっている。本研究では、ムハマディヤにおける活動だけではなく、1915年からのマス・マンスールの活動として、サレカット・イスラーム、ナフダトゥル・ワタン(Nahdlatul Wathan)、タスウィロル・アフカール(Tashwirul Afkar)等の団体での活動を分析し、以下の3点を明らかにした。

一点目は、ムハマディヤ参加以前から、マス・マンスールの中核的な活動は、イスラーム教育であったことである。彼は、自身が主催するマドラサだけではなく、上記の全ての団体においてマドラサの設立を推進していたことが史料上から明らかになった。また、その対象は、若年者だけではなく、年長者も含まれていた。彼がイスラーム教育を重要視していたことは、彼による多くの論説からも確認された。

二点目は、1920年代後半までのマス・マンスールの活動において、その多くで中央サレカット・イスラームの指導者チョクロアミノトの影響が見られることである。調査史料からは、少なくとも、マス・マンスールが1916年からサレカット・イスラーム・スラバヤ（支部）の執行部で宗教顧問として活動していたことが確認できる。一方で、彼の個人的な活動や、ナフダトゥル・ワタンやタスウィロル・アフカールといった別の団体による活動においても、その多くでチョクロアミノトの協力が見られる。それらの活動を通して、マス・マンスールは、大衆運動や組織活動の基礎を彼から学んでいったことが推察される。当時、チョクロアミノトは、マス・マンスールを「スラバヤを代表する青年ムスリム指導者」と評しており、彼に対する期待の高さがうかがえる。

三点目は、後の団結運動の指導者となり得た背景として、1920年代後半までのマス・マンスールの活動を通して、彼が培ったイスラーム諸団体の指導者との横断的な繋がり的重要性である。当時の彼の活動の多くは、スラバヤを拠点に東ジャワで展開されていた。スラバヤは、サレカット・イスラームを筆頭に、ジャワにおけるイスラーム運動の中心的な土地であった。さらに、彼が活動したナフダトゥル・ワタンやタスウィロル・アフカールは、ナフダトゥル・ウラマーの結成において、中心的な役割を果たした団体である。ナフダトゥル・ウラマーは、1926年にスラバヤで結成され、その後、イスラーム伝統派の受け皿として、インドネシアで最大のイスラーム団体のひとつに発展した。1920年代以降のマス・マンスールは、イスラーム改革派を代表するムハマディヤの指導者として頭角を現すが、それ以前の活動においては、サレカット・イスラーム、ナフダトゥル・ワタン、タスウィロル・アフカールの三団体が活動の主戦場であり、それらの活動に関わっていた人物は、1930年代後半の団結運動の主要人物と共通する点も多い。こうした人的・地域的な結びつきが、後の団結運動を主導する上で、非常に大きな意味があったと考えられる。

最後に、マス・マンスールの思想について、彼の各種論説から検討し、明らかになったことは以下の通りである。彼がイスラーム教育の重要性を説いていたことは前述の通りであるが、その他の特徴として、ムスリムの団結の重要性を主張していたことが挙げられる。彼は、当時の植民地支配やインドネシア・ムスリムの状況を改善する手段として、同胞意識に基づく、強固な団結の必要性を多くの論説や演説で述べている。こうした思想から、団結運動は展開されていったのである。一方で、彼の思想分析については、他のイスラーム指導者の思想との比較研究や、他のテーマに関する思想分析も必要であり、それらは今後の課題とする。

## （2）植民地期末期のムスリムによる大同団結運動、及びイスラームとナショナリズムを接合させる活動の分析

植民地期末期のムスリムによる大同団結として、1937年9月に結成されたミアイの活動を中心に分析した。従来の研究の多くは、この時代のインドネシア史における第一級史料である上記メイルラポルト等の植民地文書を1939年までしか使用していない。実際には、1940年以降もロンドンに置かれた亡命政府とオランダ植民地政府の間で文書（以下、ロンドン文書）が交わされていた。しかし、戦後、それらの文書は分けて管理されていたため、ロンドン文書の存在は、一般に広く知られてこなかった。本研究では、これらの文書を調査し、1940年から日本軍のジャワ進行直前までの活動も含めて分析できたことは、大きな成果と言える。それらの史料を用いた成果の一部として、先述の「メッカに居住するインドネシア・ムスリムの帰国事業」と「ムスリム指導者と各種団体の指導者で議論された独立インドネシアの国家構想」に関する分析を行った。

前者の帰国事業は、1940年頃からミアイ主導で行われた活動である。詳細な分析により、明らかになったことは以下の通りである。第一に、オランダ植民地政府は、この活動を契機に、ミアイをムスリム問題の代表と認めるようになったことである。ミアイは、メッカ居住者とオランダ植民地政府の仲介者として、交渉を担当した。第二に、先行研究で述べられるミアイ内部での参加団体や指導者間の対立関係が、この活動を推進する中で、徐々に緩和され、ミアイの組織拡大が進められたことである。この事業を通してミアイは、インドネシア各地に支部を設立し、全国的な運動となった。第三に、この活動の意義として、インドネシア・ムスリムという同胞意識を刺激する出来事のひとつとなったことである。この活動において各地で展開された演説内容を分析すると、海外に居住する「同胞」の救済という点が非常に強調されている。以上のように、ミアイは、これらの活動を通して、政府、現地ムスリム、海外「同胞」ムスリムからの信頼を獲得したのである。オランダ植民地期のミアイにとって最も成功した活動と言える。

後者の国家構想について、1940年以降にミアイとインドネシア政治連合（通称ガビ、Gaboengan Politik Indonesia, GAPI）によって議論された内容やその経過を分析し、以下のことが明らかになった。第一に、それまで政治的な活動とは距離を置いていたムスリム指導者にとって、この活動が、政治的議論を行い、その見解を示す契機となったことである。ミアイは、設立当初から政治活動とは一線を画してきたが、この議論の中で、ミアイ理事会による国家原則案を発表した。これに対して、法務長官は、ミアイに政治的議論を禁ずる通達を出しており、オランダ植民地政府もミアイの政治性を警戒し始めたようである。第二に、ミアイ理事会によって発表された国家原則案は、「国家元首はイスラーム教徒から選ぶこと」、「大臣の三分の二はイスラーム教徒から選ぶこと」、「イスラーム省の設立」、「インドネシアの国旗として紅白旗に三日月の文様を入れること」など、非常にイスラーム色が強い内容であった点である。この原案は、ムハマディヤ、ナ

フダトゥル・ウラマー、イルシャードといった政治活動を行わないイスラーム諸団体の指導者に一任されていた。しかし、具体的にどのような議論を経て、このような内容に決まったのかは不明であり、それらを明らかにすることは今後の課題である。

以上、オランダ植民地期末期には、ミアイを通して多くのイスラーム団体やムスリム指導者が政治、国家、宗教の問題を議論することになった。それらは、イスラームと政治、民族、国家という議論を深化させ、独立インドネシアにおける国家形成やムスリムの政治参加を考える上でも必要不可欠な作業である。日本軍政期研究は、独立直前の時代として、日本軍政期と独立インドネシアの「継続」や「断絶」という文脈から考察されることが多い。しかし、オランダ植民地期末期の分析をなくして、こうした「継続」や「断絶」を分析することは可能なのか、もしくは意義があるのかという疑問が本研究テーマに至った理由であり、本研究の意義でもある。独立インドネシアはイスラーム国家としては誕生せず、国家の中心にいたのは、多くの民族主義指導者であった。しかしマス・マンスールが主導したこれらの運動は、同地のムスリムと「インドネシア」を結ぶ紐帯として、インドネシアという枠組の形成においても、決して小さくはない役割を果たしたと言える。

最後に、オランダでの調査が本プロジェクトの最終年度末となってしまったため、未だ分析できていない文書も多くある。それらを早急に検討し、国内外の学術誌において研究成果として公表することを目指す。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 土佐林慶太
2. 発表標題 マス・マンスール(K. H. Mas Mansoer)の初期活動に関する研究
3. 学会等名 インドネシア懇話会第4回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 土佐林慶太
2. 発表標題 インドネシアにおける植民地期末期のムスリム団結運動：マス・マンスールとインドネシア・ムスリムの連携
3. 学会等名 東洋文庫インド・東南アジア研究部門、東南アジア研究班研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------